

第337号

2012年

1月20日

どついたニュース

全損保日動外勤支部

東京都中央区銀座5-13-7

東銀座東京海上日動ビル1階

電話 03-3542-9857

FAX 03-3542-9858

教宣部 発行

2011年 日本平和大会in沖縄

**「戦争という過ちは
繰り返してはいけない」**

**「この貴重な体験を
多くの仲間にもして欲しい」**

昨年の11月25日から3日間、沖縄県那覇市を中心に行われた「2011年日本平和大会 in 沖縄」に当支部より米沢谷執行委員、また大阪地協の代表として長田執行委員が参加しました。

この模様については全損保ホームページでも報告されていますが、あらためて兩名から「2011年日本平和大会 in 沖縄」に参加したレポートが届けられました。

「平和を守る」取りくみは全損保の大きな運動の柱です。この機会に、あらためて各組合員が「平和」について考えて欲しいと思います。日動外勤支部としても「平和を守る」取りくみを全力ですすめていきます。

2011年 日本平和大会に参加して

日動外勤支部 米沢谷道隆

沖縄県那覇市で開催された「2011年日本平和大会」に11月25日～27日の3日間の日程で参加しました。

25日の夕刻より那覇市民会館で行われた開会集会には、全都道府県から約1300人が参加をして、会場に入りきれない参加者もいました。また海外代表も大会史上最多の16人が参加したと実行委員会より報告がありました。参加者からの報告では、市民の力で世界を平和にしようという各地の熱い思いが伝えられ、閉会時間を過ぎても次々と壇上からのメッセージが続きました。



26日は早朝より「動く分科会」に参加しました。沖縄南部の悲しい戦争の歴史、県民の15万人以上が戦死し（県民の4人に1人が犠牲）、軍人よりも住民の戦死者が多かったことなど当時の状況を聞きながら南部戦跡（ひめゆりの塔・魂魄の塔・平和祈念公園・アブチラガマ）を巡りました。沖縄戦は本土決戦準備の時間かせぎの捨て石であったことや、日本兵が地域住民に対し米軍に投降することを許さず死の道連れにしたことは知っていましたが、沖縄戦の降伏調印が行われたのが、日本敗戦3週間後の9月3日であったことは今回の分科会で初めて知りました。

ひめゆり平和祈念資料館では、実際に当時のひめゆり学徒隊の女性から話を聞くことができました。話を聞いただけでも当時の悲惨な状況が目には浮かび、涙を流す参加者もいました。戦争体験者が減っていく中で貴重な時間だったと思います。暗く、じめじめした洞窟に簡易ベッドを並べただけの陸軍病院は想像を絶するものがありました。これで病院と呼べるのか、戦時下という狂気の時代は暗闇の不衛生な洞窟でも病院と呼んでしまうのか、誰もおかしいと声をあげられないように支配されていた時代が昭和にあったことに気づきました。

移動する先々で平和の大切さにあらためて気づかされた分科会となりました。1平米あたり50発という猛爆撃。隠れていれば米軍に火焰砲で焼かれ、出ていけば日本兵に殺される。美しい海上を埋め尽くしていた米軍戦艦。死体が転がり、死と隣り合わせでいる日常が昭和の時代には現実がありました。

分科会に参加した数時間で学んだことは、戦争という過ちは繰り返してはいけないこと。そして、平和を守りたいと声をあげている沖縄、全国の人たちと連帯して平和を守る運動に取り組まなければいけないということでした。

26日の夕刻からは、沖縄産業文化センターにて開催された本部オルグ、その後の損保平和交流集会に参加しました。同じ損保産業で働く仲間の職場実態、沖縄ならではの問題を聞きました。また、業界全体で抱えている問題や個社での問題なども論議しました。日動外勤支部として和解解決後の職場状況や東海日動社の会社施策を報告しました。

同業他社で働く仲間が本音で語り合える時間を作ってくれる全損保、産業別単一組織である全損保の一員の良さを実感した会議でした。

27日は那覇市内の新都心公園で閉会集会が行われ、約1600人の参加者が集まり各地の代表がリレートークで平和を訴えました。

沖縄は1972年に日本に返還された後も広大な米軍基地がおかれ続け、米軍の被害に苦しめられています。米軍基地はいらないと参加者がプラカードで意思表示をして「基地のNO!」と全員で唱和しました。また、稲嶺名護市長は、沖縄の思いを全国のみなさんに伝えてほしいと参加者へあいさつをしました。来年の平和大会は、東京で開催が予定されています。私の住んでいる多摩地区には米軍の横田基地をはじめ、近隣には由木、府中、所沢の通信基地、多摩レクリエーションセンター、相模原補給工場といくつもの米軍施設があります。米軍施設に加え、自衛隊の施設も数多く点在する東京で平和大会を開催することは必要なことだと思いました。

集会後、全損保の旗を持ち沖縄新都心地区を1時間程パレードしました。きれいに整備された新都心地区は新しいマンションや大型ショッピングセンターが建ち並んでいましたが、ここは1987年に米軍より全面返還された土地で、造成する際には沖縄戦での遺骨が多数発掘されたそうです。

3日間の大会に参加して、平和と自然を守ることが沖縄県民の切実な願いであることを肌で感じることができました。全損保は平和と民主主義を守る方針を全国大会で確立しています。日動外勤支部は今後も変わらず平和に向けた取り組みに積極的に参加をして、「核も戦争もない平和な日本の実現にむけて」全損保の平和運動の先頭に立っていかねばならないと思いました。

日本平和大会 in 沖縄レポート

全損保大阪地協 長田 元

11月25日から11月27日まで沖縄で開催されていた日本平和大会 in 沖縄に参加してきました。

26日は、普天間基地移設問題で移設先の候補地にされている辺野古と、「ヤンバルの森にヘリパッドはいらない！！」と座り込みを続けている東村高江地区に行ってきました。普天間基地返還の代わりに、基地の移設先の候補地になっているのが名護市辺野古地区です。ここには隣接して米軍海兵隊のキャンプシュワブがあり、ここは入隊したばかりの海兵隊員が訓練を行う場所です。側には弾薬庫があり演習所では実弾訓練なども行われます。時々、民間人の集落に流れ弾が飛んでくることもあるそうです。ここからイラクやアフガ



ニスタンへ海兵隊員が送られていきました。このキャンプシュワブ沿岸の海を埋め立てて、滑走路をつくり、軍艦も入港できるような普天間基地よりもさらに機能を拡大した基地の建設が計画されているそうです。辺野古沿岸・大浦湾にはジュゴンやウミガメ、アオサンゴなどが生息しており青く美しい海がひろがっていますが、ここに基地が建設されれば、この美しい自然が破壊されてしまいます。

地元のおじい・おばあちは「沖縄戦が終わったあと、地上は焼け野原で食べるものもなく、どうしようもない時にこの海から魚や貝などを獲って命をつないだ。この海から命を貰っているのだから自分たちは人柱になってでもこの海を守るんだ」と言っています。辺野古でのたたかいは「非暴力」のたたかいで、現地住民はもちろん、多くの支援団体や個人、各政党や学者、中核派や革マル派などの極左集団までもが一致団結して「辺野古の海をまもれ！！」とたたかっています。このたたかいが始まって約15年経ちますが、多くの人々の団結で杭一本たりとも打たせていないそうです。

沖縄本島北部に位置する東村・高江地区は生活区域を最大の米軍専用施設の北部演習場に取り囲まれている地域で約150名の村民が生活しているところです。この北部演習場は7800ヘクタールのジャングル戦訓練所で、米軍ヘリが低空で飛び交い、爆発音や銃声が聞こえることもあるところです。この北部演習場の内の半分を返還する代わりに、新しいヘリパッドの建設が計画されています。そのヘリパッドは高江の住民が住んでいる生活区域を取り囲むように建設され、そこにオスプレイ（プロペラが可動式で垂直に離着陸

できる飛行機とヘリを合わせたようなヘリ)を導入する予定らしいです。しかしこのオスプレイは、可動式のプロペラの操縦が難しくバランスを崩しやすいので、試験飛行の段階から何度も墜落事故を繰り返し、多くの死者を出しているという欠陥機です。多くの村民は、この危険なオスプレイが自分たちが住んでいるすぐそばに導入されるということを知られていません。また、この演習場の中に沖縄本島の60%の生活用水をまかなうダムがあります。米軍はこのダムでもボートを浮かべて訓練を行い、模擬弾や空砲、廃棄物などを投棄しているそうです。この演習場近辺は「やんばるの森」といって、イタジイやオキナワウラジロガシなどの亜熱帯性常緑広葉樹林が良好な状態で残されています。地球上でここだけにしか生息していないノグチゲラやヤンバルクイナなどの固有種や絶滅危機にある種の重要な生息地になっています。「こどもたちに残すのは基地ではなくて、やんばるの森」「この自然と自分たちの生活を壊されたくない」という理由で高江の人たちはたたかっています。ただ、人が少なくて常に座りこみなどの行動をできる人が少ないので大変苦勞をされているようです。辺野古の問題は新聞やテレビでも取り上げられますが、高江のことはほとんど取りあげられていません。一人でも多くの人に支援に来てほしいと訴えておられました。

辺野古でも高江でもたたかっている方々はみなさん明るく元気で、励ましに行った自分たちが逆に元気ももらいました。そこに住んでいる当事者は少数であっても、「自分たちは間違ったことはしていない」と信念を持って、広く訴えていけば米軍や日本政府のようなとてつもなく大きな相手とたたかっていけるんだということを改めて実感しました。

次回こういうチャンスがあるならばもっと多くの仲間を連れて行き、みんなにもいろんなことを経験してほしいと思いました。

以上